

清 弁 の 三 性 説 批 判

Paul Hoornaert

清弁は『中観心論頌』(MHK),『思釈炎』(TJ),『大乘掌珍論』及び『般若灯論』(PP)の中で瑜伽行派の学説を厳しく批判している。何れの場合に於ても、彼は、彼自身の二諦説と対比しつつ三性説を集中的に批判している。清弁によると、二諦の正しい識別が人々をして仏が説いた真実へ入らしめる唯一の手段であり、三性を説くことによって人々を真実知 (tattvajñāna), 一切の知覚の寂滅 (sarva-upa-lambha-upaśama), 無分別知, 即ち解脱へ導くことはできない。以下、まず、清弁が説いた、二諦説に視点した、真実への悟入の階段を明らかにする (I)。ついで、彼の二諦説の観点からなされている三性説批判を述べてみたいと思う (II)。

I. (a) 清弁によると、真実への悟入は、世俗諦 (saṃvṛtisatya) の正しい理解から始まる。彼は PP (ad MMK XXIV. 8, D. Dbu Ma 2, Tsha 228a2-3) の中で世俗諦を次のように定義する:「世間の世俗 (lokasaṃvṛti) とは世間の言説 (lokavyavahāra) である。即ち、『色等の存在は生起し、存続し、消滅する』、『Devadatta は歩く』、『Viṣṇumitra は食べる』(……) 等の言説は、世間の言説の限りでは誤ってはいない (aviparīta) から、世間の言説に於ける真理 (lokasaṃvṛtisatya) である」。TJ (ad MHK III. 13, D. Dbu Ma 3, Dsa 56b3-4) の中でも同様の定義が述べられている:「世俗 (saṃvṛti) とは色等のあらゆる存在をはっきりと識別する世間の正しい言説 (aviparītalokavyavahāra) である。それは日常生活のしきたりに於て真偽の基準 (pramāṇa) になっているから、真理 (satya) である」。この定義は、『菩薩地』(ed. U. Wogihara, 37⁸⁻²¹) と『中辺分別論』(ed. G. Nagao, 42⁵⁻⁸) に見られる「世間一般に承認されている真実」(lokaprasiddhatattva) の定義と類似している。『菩薩地』によると、無始以来世間に於いて設定されている言葉とそれらが指示する対象との対応関係 (saṃketa) に習熟している人々は、存在と非存在に関して共通の理解を持っている (darśanatulyatā)。この常識が承認する真実は lokaprasiddhatattva と呼ばれ、清弁が説明する lokasaṃvṛtisatya にほぼ相応している。

世間一般の人々は、「空中に花は存在しない」、「地にまかれた種より生じた花は存在する」というような、存在と非存在に関する常識で満足し、それとは別の、もっと勝れた真理を追求しない。存在するものの中には他より勝れた実在性を持

っている存在があるのか、或いは常識という真理よりも勝れた真理があるのか、という考察は世間一般に於いて行われていない。世俗の世界は、勝義を求めずに、それに関して考察しない牛飼いのにも通用する世界である。それは勝義としての真実を知らない無明の領域である。そしてこの無明は、外道と中観学派以外の仏教諸学派が誤った考究 (vicāra) を以て勝義を誤解する無明とは異っており、勝義に無関心で、それを理解しようとしもない無知なのである。

(b) 解脱をめざす者は、存在と非存在に関する平凡な世間知を超え、勝義知の探求に専念する、より高い階梯へ飛躍しなければならない。この第二の階梯は、経典と正理に基づいて勝義を追求する考究 (vicāra) の世界である。これは、それぞれの経典と考察を以て勝義を追求する外道と仏教の智者 (paṇḍita, mkhas-pa) の世界である。このレベルでは、世間知にとっては平等に存在するものの内で特定の存在が他の存在より勝れて勝義的な存在であると主張する様々な学説が生じる。たとえば、勝論派は ātman を、数論派は puruṣa を、有部は法の自性を、そして瑜伽行派は vijñāna を勝義的な存在と考えている。清弁は、これらの学説のすべてが二諦を理解しない考究より生じたと考え、真実知即ち解脱へ導かない学説であると批難している。

清弁は、真実知へ導く正しい考究を『中観心論頌』の中で次のように記述している (MHK III. 12-23ab; TJ, Dsa 56a6-58b4)。まず、正しい考究に入るためには長い準備期間が必要である。その要点は三つである。[1] 世間一般のレベルに立って世俗諦に関する正しい知識を得ること。[2] 文法学 (śabdavidyā), 論理学 (hetuvidyā) 等に熟達し、勝義を説く内外の経典と論書を読みこなして、聴聞による知識 (śrutamayajñāna) の範囲をできる限り広げること。[3] 勝義の追求に専念できるように、常に心の統一 (samādhi) に努めること。以上の準備を終わった心の中に正しい考究を行う般若 (prajñā) が生じる。この考究は次の問題を吟味する：「世間一般が承認する諸々の存在の内で勝義的存在としてふさわしい存在があるのか。もし有るならば、その存在が勝義的な真実であろう。もしなければ、真実は外に求められるべきである」。この問題に対する清弁の解答は彼の諸著作の中で推論式で表現されているのだが、彼は、世俗諦の範囲内では容認されうる存在の一々は、他に依って生起している (pratityasamutpanna) から勝義に当たらないことを論証する。その場合、彼の論敵は、勝義を求めず、二諦を区別しない世間ではない。論敵は、勝義を追求しつつそれを ātman, puruṣa, vijñāna 等の特定の世俗的存在に求めることによって二諦を正しく識別しない外道と仏教諸学派なのである。

(c) 勝義に関する誤った考究を沈黙させる般若は、尚分別の領域に属する *sāṃketikī prajñā* (MHK III. 7-9) である。と同時に、この般若は一切法のどれ一つも勝義であると分別しないから、真の勝義知、即ち無分別智への道を拓く。勝義を追求するこの般若が、一切法は勝義に当たらないという明知を得た時には、考察されるべきものはなに一つ残っていない。その時、その頂点に達した *sāṃketikī prajñā* は考察を放棄し、沈黙に落ちる。これが一切の知覚の寂滅にして、聖者の沈黙である。これは勝義 (*parama-artha*) なる真実 (*tattva*)、即ち空性を見る無分別智にして、*pāramārthikī prajñā* (MHK III. 10-11) である。

以上、清弁が説く二諦の識別による真実への悟入の要点を述べてみた。次に、彼が二諦説の観点から三性説に対して為す批判を述べてみよう。

II. 三性説は瑜伽行派の真実説である。この学派にとっては、三性を識別しない学説は真実知への方便ではない。真実を追求する菩薩は、遍計所執性の無、即ち円成実性 (空性、勝義) の有を確知することによって、依他起的存在に対する誤った知覚を根絶しなければならない。清弁によれば、遍計所執性の無得 (*anupalambha*) と円成実性の知覚 (*upalambha*) とによって依他起性の正しい知覚に至る道は二諦を理解しておらず、一切の知覚の寂滅へ導かない。

(a) 先ず、遍計所執性の無得に対する清弁の批判を紹介しよう。瑜伽行派は、外境が存在せず心のみが存在し、そして所取 (*grāhya*) としての外境が存在しなければ、それを知る能取 (*grāhaka*) としての心もまた存在しないというふうに遍計所執性の無を論証している。と同時に、所取能取を離れた心が依他起的存在にして、勝義的な実在 (*paramārthasat, vastu, dravya*) であると説く。清弁によると、このように遍計所執性と依他起性とを区別し、一方を非実在、他方を勝義的な実在と考えるのは世俗諦を無視する考察である。世俗は「空中の花は存在しない」、「種より生じた花は存在する」といったように無と有とはっきりと識別する真理に従って機能している。三性説は、世俗の事に余計な口出しをし、世俗が容認する諸々の存在の内で外境の存在を否定し、そして識のみに存在性を認めることによって世俗諦を拒絶しようとする。

世間は、感覚知が外境なしにも生じるという学説を聞くと、それに背中を向けて真実知に入ろうとしないであろう。それ故に、勝義を追求する考究は、世間が承認する世俗諦から出発しなければならない。従って、その出発点は、外境が知覚と同様に因縁より生じた存在であり、外境なしに感覚知は生じえないという常識でなければならない。更に、因縁より生じた存在に固有の在り方、即ち一々の

存在には他にない自性 (svabhāva) があることをも世間と共に承認しなければならない (PP ad MMK XV. 2, Tsha 158a6-7)。換言すれば、世俗の範囲内では依他起性を容認しなければならない。

(b) そうしてこそ、勝義を探究する般若は、因縁より生じた諸々の存在の中の何れの一つが勝義に当たるのかという考究に入ることができる。しかし、一々を考察してみた結果、その何れも勝義に当たらず、勝義的には一切の存在は無自性であるというのが考究の結末である。つまり、因縁より生じたものは勝義としては無生 (anutpanna) であり、全く実在性がない。依他起的存在の総ては、勝義の追求に於て、勝義に当たらないものとして否定され、棄却されるべきである。これに関して清弁は、依他起性が生無自性 (utpattiniḥsvabhāva) であるという学説を論駁する。瑜伽行派によれば、他によって生起する存在は、自らの力によって生じないという意味のみで無生である。これに対して清弁は、存在するものは世俗的には他によって生起するからこそ、存在は勝義的には無生、即ち非実在であると反論する (MHK V. 71-2)。彼によると、他に依って生起する存在の「生起」が取得されている限り、無生無滅なる勝義の通達はありえない。

(c) 瑜伽行派は、勝義の領域から依他起性を除去しないから、勝義をも誤解している。この学派によれば、勝義 (空性、円成実性、真如) とは、依他起的に存在する法が遍計された自性に関しては常に空である在り方である。しかし、このように勝義は依他起的な存在 (dharmin) に属している属性 (dharma) と考えられている。「空性は虚妄分別の中に存在する」(『中辺分別論』I. 1c) という説では勝義は、依他起的存在に内在する実在 (dravya)、又は造られていない (akṛtrima)、他に依存しない (paratranirapekṣā) 自性と考えられている。清弁は、空性を「二無の有」(dvaya-abhāvasya-bhāva) と定義する『中辺分別論』(I. 13) の説を厳しく批判する。彼にとって勝義は決して「何か」ではない。それに対して、瑜伽行派が説く真実知は未だ「何か」、即ち円成実性と呼ばれるようなものを見る知覚である。清弁からみれば、「何か」を勝義と見る知は未だ取得であり、真の無分別智ではない。論敵は次のように反論するかもしれない：「綱に存在しない蛇に対する恐怖を追い払うために、綱の存在を知覚しなければならない。それと同様に、遍計所執性の分別を根絶するために、無分別智が「何か」を、即ち真知を認識しなければならない」。これに対して清弁は答える：「蛇の非存在を知るだけで恐怖が去る。綱の存在を知る必要はない」(PP ad MHK XXV. 24, Tsha 247b5-248a1)。

(東北大学大学院)